

シャンティ国際ボランティア会

2011年夏 NGO 海外研修プログラム

成城大学 文芸学部 英文学科 3年 高市 史

はじめに

今回の私の研修の目的は、“図書館事業課の現地での活動を実際に見て学ぶ”というものであった。以前からシャンティ国際ボランティア会（以下 SVA）の東京事務所で、アジアの図書館サポーターのボランティアをさせて頂いていたため、子どもたちの書く感謝状や、本を手に持ち笑顔を見せる写真などに触れる機会があり、SVA の行っている図書館事業に興味を持つようになった。そうしてこの研修に参加し、図書館事業課の仕事を中心に、多くのことを学ばせて頂いた。その中でも今回のレポートでは、ラオス事務所の図書館事業課が行っている、公共図書館の支援事業と絵本の出版活動について学んだことをまとめる。

I 公共図書館への支援

(1) ラオスの公共図書館の現状

Formal education である学校と違い、図書館は Non-formal education の分野の教育機関である。しかし公共図書館から小学校へ、移動図書館などの読書推進活動を行っており、Formal education へのサポートという役割も持っている。また 1994 年、UNESCO によって発表された「公共図書館宣言 (UNESCO Public Library Manifesto)」では“公共図書館とは年齢、性別、人種を越えて、すべての人が等しく利用できる教育機関である。”とされているように、その重要性は明らかである。

しかしラオス全国 17 県の中で、県レベルの公共図書館があるのはわずか 9 県と、いまだ少ない。またラオスの公共図書館は情報文化省の中の出版局が管轄しているが、その出版局はテレビやラジオなどの部門に比べて予算が少なく、財政的にも大変厳しい状況にある。

(2) SVA の支援

このように厳しい状況にあるラオスの公共図書館を、SVA は大きく分けて建設、蔵書、人材育成の面で支援している。今は 2010 年 8 月から 2013 年 8 月までの 3 年間の契約で、JICA 草の根技術協力事業により、資金をもらって“公共図書館を通じた読書推進活動”を行っている。

(3) 公共図書館のモニタリング

図書館員の方たちの人材育成のために、SVA は様々な研修会を行っている。また研修会後もその内容が生かされているかどうかを定期的にモニタリングすることは、活動の質を保つためにも、とても重要である。研修中は何度かスタッフの方の出張に同行させて頂き、公共図書館のモニタリングについて実際に見て学ぶことができたので紹介する。

この出張は、ラオス南部のサワンナケート県とチャンパサック県の 2 つの公共図書館で以前 SVA が図書館員の方たちに行った研修会について、のモニタリングが目的であった。事務所がある首都ヴィエンチャンから目的地までは、車で 9 時間ほどかかる距離であった。



サワンナケート県公共図書館



チャンパサック県公共図書館

まず研修会で教わった内容について聞いたところ、それぞれの図書館員の答えには差があった。サワンナケート県公共図書館では、行動計画表と予算書のどちらもまだ使いこなせていない、ということであった。一方でチャンパサック県公共図書館では、行動計画表の作り方は習得し、予算書も工夫して作られているという答えが返ってきた。

今回のミーティングでは、研修会の件以外にも、図書館の運営についてなど様々な情報共有ができ、それぞれの問題点や良い点についても知ることが出来た。問題点としては、サワンナケート県では図書館員の人数が少ないというこ

と、チャンパサック県では蔵書があまり増えないということが挙げられた。しかしそれぞれに良いところもあり、サワンナケート県の公共図書館については、直接の管轄でない教育局が積極的に関わっており、予算も2つの局から確保しているという、とても良い協力体制が取られていた。さらに人事異動が少ない分、各人がきちんとスキルを習得しているとのことである。チャンパサック県の方では、研修会で学んだことをしっかり生かしている点、そして年に一回 **Education Management Meeting** という話し合いの場をつくっている点が良い点として挙げられる。

公共図書館での話し合いが終わると、次は行政における公共図書館の管轄である情報文化局に向かう。モニタリングの際にはこうして、当の公共図書館員の方だけでなく、国立図書館の方も同席したり、行政の方々と直接話し合う機会をつくるようにしている。そうすることで、お互いの情報共有ができ、協力体制もつくられていくそうである。チャンパサック県でも、情報文化局での話し合いに教育局の方が同席し、協力体制は重要であると話されていた。

SVA が支援事業を進める際には“出口戦略”を念頭に置くようにしている。支援の期間が終わったら、現地の方々だけでも運営していけるように、自立発展性を見据えた活動を行うようにしているそうである。そのためには、人材育成や関係者の協力体制が必要だということ、そしてひとつの事業を行うのにも様々な角度からの視点が大切だということが、今回の出張で実感できた。



サワンナケート県情報文化局



チャンパサック県情報文化局

(4) 公共図書館へのアンケート

公共図書館でのミーティングの際、図書館員の方に質問をする機会を頂いたので、その内容を以下にまとめる。

【サワナケート県公共図書館】

Q 1 : 開館当初に比べて、図書館の利用者数は増えましたか？

A 1 : 減りました。小学生は減っているが、中高生や一般の数は減っていません。小学生が減った理由は、教育局が小学校に図書室を設置するようになったので、公共図書館まで来る必要がなくなったという、ポジティブな理由です。また、遠いところにある学校には、移動図書館活動という形で読書推進をしている。

Q 2 : 子ども達に向けて、Non-formal education としてどのような取り組みをしていますか？

A 2 : お絵かきや読み聞かせ、またより良い読書が出来るように言葉や文法を教えています。

【チャンパサック県公共図書館】

A 1 : とても増えました。開館した年の 2004 年はメンバー制度もなく、利用者数は 100 人以下だったが、今年は 4000 人を超えました。

〈内訳〉来館者数…4088 人（借りた人数含む）

本を借りた人…940 人

メンバー登録者数…123 人

メンバー登録に掛かる料金は、一年につき子ども 6000 キープ、大人 12000 キープです。

A 2 : お絵かきや読み聞かせ、折り紙、単語の組み合わせや言葉についてのゲーム、本の内容についての Q&A、知識を問うテストなどを月に一度行っています。尚、こどもの日などの祝祭日もアクティビティをしています。



Non-formal education である公共図書館として、その図書館員の方は子どもた

ちに対して実際にどのような取り組みをしているのかを知りたいと思い、質問をさせて頂いた。その結果どちらの図書館員の方々も、より多く子どもたちに何度も来てもらえるように、そしてより充実した読書が出来るように、と工夫した活動を行っていることがわかった。

II 絵本の出版

(1)ラオスにおける出版活動の状況

日本などの国と比べると、ラオスにおける出版状況はやはりとても厳しい。近年、民間の出版社が増えてきてはいるものの、年間の出版数はいまだに少なく、もちろん絵本の数も少ない。またラオスは社会主義の国であるため、行政の情報文化省が本、雑誌、新聞など全ての出版物に検閲を行っている。さらにラオスは出版に必要な紙の資源に乏しく、外国からの輸入に頼っているという問題もある。

SVA の図書館事業課では、ラオスの絵本不足の改善のために、絵本の出版活動を行っている。ラオスの伝統を守るために必要な民話絵本はもちろん、若い作家の育成にもつながる創作絵本も出版している。

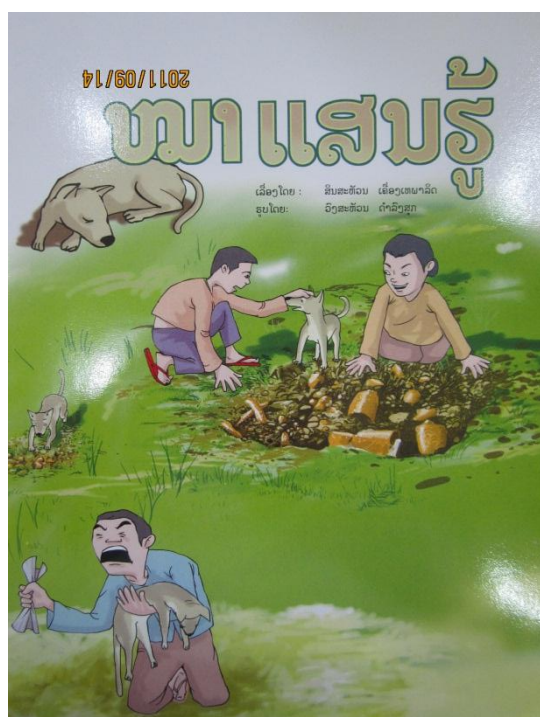
(2)絵本出版の流れ

以前から絵本の出版に興味があったので、今回の研修中、スタッフの方たちに確認をしてもらいながら、SVA ラオス事務所の絵本出版の流れをまとめさせて頂いた。全ての工程にかかる費用の合計は、1タイトル(約3千冊)につき約90万円である。

【絵本出版プロセス】

- ① 出版委員会に登録されている作家メンバーの中から何人か作家を選び、お話の内容や著作権について話し合う。
- ② 移動図書館の際に実際に子どもたちにお話しを読み聞かせ、その反応を参考に、お話を選んでいく。
- ③ 選んだお話と、その理由を出版委員会に報告する。
- ④ 題名を決定し、著作権代を支払う。
- ⑤ イラストレーターと契約を結び、イラストの作成が始まる。
- ⑥ 出版委員会にイラストの確認をしてもらう。(改善点があれば再提出する)
- ⑦ 来年の絵本出版の予算計画を作成する。
- ⑧ 出版委員会と、絵本のレイアウトについての編集会議を開く。
- ⑨ レイアウトを修正する。

- ⑩ 検閲のため、出来た絵本を情報文化省に送る。
- ⑪ 出版許可をもらうため、Publishing House に絵本を送る。(出版法により)
- ⑫ ISBN の取得のため、国立図書館に絵本を送る。
- ⑬ 印刷会社に絵本を送る。(印刷が終わるまで約 1 か月掛かる)
- ⑭ 完成した絵本を図書館や学校に配布する。



SVA がラオスで出版した絵本

(3) ラオスの絵本の課題

ラオスの絵本には、改善されるべき点がまだいくつもある。例を挙げると、物語の構成が不明確で読者を混乱させる点、多くのイラストがコンピュータグラフィックを用いて描かれており、子どもを疲れさせてしまう点、イラストの細部が曖昧で正しくない点、などがある。

また、ラオスの絵本には対象年齢というものがないので、日本のように絵本を作る際にある程度、対象年齢を設定すれば、読者に伝えたいことは何なのかが明確になるのではないかと感じた。そして手書きのイラストはコンピュータグラフィックを使用したものに比べて、費用も時間も多く掛かってしまうことが分かった。ラオスの絵本の質の向上のためには、やはり予算を増やすことも必要であるように思う。



出張先の小学校

おわりに

この1か月の研修期間は、毎日色々なことを学ばせて頂き、やはり日本にいても分からなかったことに気づくことが出来、とても貴重な経験であった。図書館事業課が現地で具体的にどのような活動をしているのか、その方法と内容について実際に見て学ぶことが出来た。また研修中にスタッフの方には多くのことを教えて頂き、そのどれもが参考になるものばかりであった。その中でも、“子どもたちはあくまで間接受益者であって、私たちが直接に導入を行うのは関係者の大人たちです”という言葉がとても印象深かった。現地の方々の自立発展性のためにも、この考え方は重要であり、そのことに気づかせて頂けて本当に良かったと思う。この研修で教えて頂いたこと、経験したことは、これからも大切にして自分の人生に生かしていきたいと思う。